土岐市教育研究所
ＴＥＬ　0572-54-1111（内373）
ＦＡＸ　0572-55-6310
ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ　kyoiku@city.toki.lg.jp
所報　Ｎｏ．５６２
発行責任者　所長　塚本　修
発行日　令和４年　３月１４日
題字　山田恭正　教育長

『なかよし遊び』

撮影　下石小学校
中嶋　聡子　教頭先生

恩

土岐市教育研究所長　塚　本　　修

「恩人」「恩返し」「恩に着る」など「恩」という文字を使った言葉があります。「恩」の意味を広辞苑で調べてみました。「君主・親などのめぐみ。いつくしみ」とありました。決して見返りを求めていない「無償の恵み」だと思うのですが、見返りを前提とする「有償の恵み」になってはいないかと思うことがあります。鎌倉時代の「御恩と奉公」の考え方が根強く残っているのかなあとも思います。

「こんなにしてあげたのだから、ありがたく思いなさい」と恩を押し売りする人や、返礼がないと「恩知らず」と言う人などは、本当の「恩」を理解していないのでは…と思ってしまいます。本来、恩を施した人はその行為を当然のこととして忘れるべきで、恩を受けた人は、それを忘れずに必ず報いるように努めるべきだと思います。

作家の井上ひさしさんは、中学生の時に岩手県一関市で５ヶ月ほど暮らしたことがありました。『井上ひさしと141人の仲間たちの作文教室』で次のように述べています。

『町の本屋で国語の辞書を持ち出そうとしたが、店番をしていたおばあさんに見つかり、店の裏手で薪割りをさせられた。作業が終わると、おばあさんが国語辞典を手渡し「働けばこうして買えるのよ」と言って、労賃から辞書代を差し引いたお金までくれた。全うに生きることの意味を教えてくれた。およそ半世紀後、一関市において無報酬で作文教室の講義をした。これは「恩送り」だ。誰かから受けた恩を直接その人に返すのではなく、別の人に送る。その送られた人がさらに別の人に渡して世の中をぐるぐる回っていくのだ。』

当然ですが、おばあさんは「見返り」を期待して「恩」を売ったとは思っていません。しかし、井上ひさしさんは「恩」を受けたと思い、それを別の人に還元しています。

私たち教職員も「こんなにしてやったのに…」と子どもや保護者に対して思うことはないでしょうか？子どもや保護者に正対して、教育活動を推進することで給料をもらっている＝仕事なので「無償の恵み」とは言えないかもしれませんが、少なくとも「見返り」を期待して子どもや保護者と接しているわけではありません。逆に、子どもや保護者から「先生には恩がある」と言ってもらえるだけでありがたいと思います。さらには、子どもや保護者から学ばせてもらっている「恩」があると考えて、それを「恩送り」として、これから出会うであろう子どもや保護者に還元しないと…とも思っています。皆さんはどう思われるでしょうか？

読書習慣づくりのための環境を整える

土岐市教育委員会
読書活動推進室　　清本　直子

家で子どもが長時間テレビをみていたり、ゲームをしていたりすると、気になって、やめるように声をかけるのに、それが読書であったらどうでしょう。きっと、多くの場合はそのまま見守るのではないでしょうか。それは、多くの大人が、子どもの成長や教育に読書が大きな役割を果たすことを認識しているからです。

実際に、読書によって得られる効果は本当にたくさんあります。例えば、語彙が増えること。初めて出会う単語であっても、絵や文脈などから意味を推測できる場合が多く、自然と語彙が増えていきます。以前講演会で、毎日25分程度の読書をしている小学生は、まったく本を読まない小学生よりも、1年間で200万ほど多くの単語に触れているのだと聞いて驚きました。学校での授業は、語彙力・語学力に頼るところが大きいため、幼児期の早い時期に読み聞かせや読書で語彙を増やすことができるかどうかは、学習に大きく影響してくると考えられます。

他にも読書をすることで、集中力や想像力が鍛えられたり、文脈の理解力が身に付いたりします。実際には経験がないことも読書を通して疑似体験することができ、感情や感性、共感力、社会性を身に付けたり、悩みを解決する力を身に付けたりすることにもつながるなど、本当にたくさんの効果があります。だからこそ、幼少期から読書に親しむ習慣が大切になってくることは言うまでもありません。

それなのに、「読書離れ」「活字離れ」が指摘され、小学生の読書量は、30年前と比べて3分の1程度になっているとも言われています。どうすれば読書習慣を身に付けることができるのかは、大きな課題です。

私自身は、幼少期から体を動かすことの方が好きで、自分から進んで読書をすることは多くはありませんでした。それでも、家には何冊かの本があり、家族に読み聞かせをしてもらったり、同じ本を読んで感想を交流したりすることもあり、そんな時は楽しいと感じていました。ただ、小学校に入学した最初の夏休み明けに、担任の先生から宿題の読書感想文を何度も書き直すように言われたことをきっかけに、読書感想文に苦手意識が生まれ、読書も嫌いになりました。それでも、学校の図書館まつりの企画や友達から勧められた本を読んだことで、何冊かのお気に入りの本はでき、今でも時々読み返しています。

私のような経験は、特別なことではなく、今の子どもたちにも当てはまるのではないかという気がします。「読書で嫌な経験をしない」「身近にたくさんの本があり、いつでも好きな時に好きな本を手に取ることができる」「楽しそうに読書をしたり、読んだ本の感想を楽しそうに交流したりしているモデルがある」そして、何より「読書は楽しいと体感できる」そんな環境づくりをすることが大切です。

土岐市では、令和３年度、すべての学校に司書支援員が配置されました。コロナ禍で図書館での本の貸出が制限されたり、朝読書や配膳時読書ができなかったりと、これまで以上に読書の機会をもちづらくなっていますが、各校で、定期的に読み聞かせを行ったり、子どもたちを図書館に誘う掲示を作ったりと工夫をしてみえます。さらに、校内で司書支援員を中心に、子どもたちが互いに「おすすめの本」を紹介し合う機会を設けたり、読書を通していろいろな「楽しさ」を味わったりできるよう、アイディアを凝らした取組ができるのではないかと期待しています。

また、土岐市図書館では、電子図書館も開館されました。今後は、土岐市図書館とも連携しながら、子どもたちの読書環境を整え、素敵な本との出会いを提供できるよう努めていきたいものです。

令和3年度　土岐市教育実践論文入賞者

	賞	学校名	教科・領域	氏名	論文テーマ	東教推
一般の部	優秀賞	肥田小	その他	足立　佳美	子どもが主体的に学び、力を伸ばす指導の工夫 ～子どもの力を引き出す環境づくりと指導の在り方～	優良賞
新人の部	新人賞	西陵中	体育/保健体育	水口　雅貴	みんなでできる　みんなができると実感できる授業づくり ～ＩＣＴ機器を活用した個の気づきのある器械運動の授業～	新人賞
	新人賞	肥田小	その他	山田　康弘	校内の情報化を推進し、日常的にＩＣＴを活用できる学校を実現する情報化推進リーダーの役割 ～授業でのＩＣＴ活用指導力向上に重点を置いた校内研修の工夫～	入選
	新人賞	妻木小	道徳	岩元　悦子	自己を見つめ、よりよく生きようとする児童を育む道徳科の在り方 ～登場人物の気持ちに寄り添い、道徳的価値を自分のこととして考える学習活動を通して～	入選
	新人賞	妻木小	算数/数学	山本　凌司	ICTを活用した算数科授業 ～「課題解決学習・協働的な学び」の実現に向けて～	入選
	入選	土岐津小	理科	神谷　奎吾	「理科の見方・考え方」を働かせ、主体的に問題解決に取り組む児童の育成 ～教科指導における効果的なICT活用を通して～	
	入選	泉小	算数/数学	伊藤　風花	算数科における思考力の育成 ～ICTを活用したプログラミング学習～	
	入選	土岐津中	算数/数学	福田　朋子	主体的・対話的に学習に取り組み、学びを深める生徒の育成 ～教科書、少人数交流、振り返りシートなどの活用の工夫～	
	入選	肥田中	社会	伊藤　里奈	資料を選択活用し、社会的事象を主体的に解決する生徒の育成 ～仲間との協働活動やICTの活用を通して～	

令和3年度　土岐市実践記録入賞者

賞	学校名	氏名	作品（記録名）
教育長賞	泉幼稚園	加藤　一哉	「使　命」～コロナ禍での園長としての取組～
教育長賞	泉幼稚園	泉幼５歳児 いずみっこ	遊びの広がりや友達との関わりを支える環境構成
教育長賞	駄知中学校	奥谷　治由	学級通信
特別賞	泉西幼稚園	古川　直利	NISHIYOU PLAYBOOK 2021
特別賞	駄知小学校	中島　健志	子どもが自ら学びをすすめるためのＩＣＴツール

令和３年度　土岐市教育実践論文審査講評

審査委員長　肥田中学校長　加藤　充康

コロナ禍の中にあっても、土岐市の教育方針「『やってみたい』を引き出し、『できた』『わかった』と実感できる授業の実現」をふまえ、目指す児童生徒の姿を明確にして実践を積み重ね、その成果を論文にまとめてくださいました。粘り強く指導改善に取り組む先生方の熱い思いに、感銘を受けました。心から敬意を表します。

今回の教育実践論文について、以下に成果や課題等を記します。

１　応募状況

出品総数は、小学校１１点、中学校１０点、幼稚園より１点の２２点でした。内訳は、一般の部の対象が２点、新人の部の対象が２０点でした。教科・領域別では、教科１４点、各領域８点となっています。また、テーマの文言の中で「ＩＣＴ」を含む論文は１０点、「主体的・対話的・深い学び」を含む論文は８点あり、喫緊の課題に迫った実践が多くありました。

２　実践論文にみられたよさや成果

（１）目指す児童生徒の姿を明確にしている

児童生徒の実態を捉え、要因の分析等を通して、「どんな力を付けさせたいのか」「どのような姿になればよいのか」ということを明確に示している論文がほとんどでした。実践の「ゴール」を具体的にイメージすることで、実現に向けた手立てが明確になると改めて感じています。

（２）児童生徒の成長や変容がよく捉えられている

児童生徒の発言内容、ノートの記述、行動の様子等を示し、児童生徒の成長・変容を捉えた論文が多くありました。少しの「変化」にも気付くことができるよう、児童生徒の姿をよく「みる」ことを意識し、アンテナの感度を高くしていきたいものです。

（３）課題を振り返るための的確な評価がなされている

どの論文も、授業終末における評価を工夫して行っていました。課題について振り返ることは、「何をどのように学んだか」「できるようになったことは何か」について、個々のメタ認知を促します。その積み重ねが主体的な学びにつながっていきます。

３　今後の課題

・実践の成果を広め、誰もが今後の指導に生かしていけるように、研究内容のどういう点が一般化・普遍化されたのか、はっきり分かるように記述したい。

・研究課題については焦点化するようにしたい。限られた紙面なので、実践全部を網羅するのではなく、研究内容に関わる部分に絞って論述することも有効である。

・ＩＣＴ機器は、あくまでも教科等が求める本質を具現するための手段であり、その活用自体が目的とならないようにしたい。

先が見通せない世の中です。今まで当たり前に行ってきたことができない状況も続きます。それでも、目の前にいる子どもたちのために、試行錯誤しながらできることをやっていく。その姿勢・心構えを本年度の論文から学び、土岐市の教育がより一層発展していくことを願っています。

令和３年度　土岐市「実践記録」審査講評

土岐市教育研究所　主任　加 藤　　望

土岐市の実践記録は、今年度で５年目となりました。

実践記録の募集は、土岐市立の幼稚園・小学校・中学校教職員の皆様の日々の取組を実践記録としてまとめることを通して指導力の向上を図ることや、応募いただいた実践記録を閲覧して識見を広げ、日々の実践に役立てていただくことを目的としています。今年度は閲覧の機会を計画できませんでしたが、ぜひ参考にしていただきたい実践がたくさんありました。

１　応募の状況について

今年度は、「Ａ：通信等」「Ｂ：教科プリント、児童生徒ノート等」「Ｃ：とき丸活用」「Ｄ：ＩＣＴ活用」と「E：それ以外」の合計５部門を募集しました。市内の先生方からは個人・団体あわせて９点のご応募をいただきました。

２　内容や結果について

実践の内容は、子どもや教職員に向けて地道に取り組まれた通信や、園や学校の教育課題の解決に向けた取り組みをまとめられた作品などに加えて、目新しいジャンルとして、ICT 機器や「とき丸」の有効活用にかかわる作品をご応募いただきました。

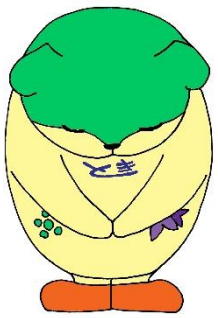
審査の結果、最高賞である「教育長賞」には、泉幼稚園長の加藤一哉先生、共同実践された「泉幼５歳児いずみっこ」の皆さん、駄知中学校の奥谷治由先生の３つの作品が選ばれました。新型コロナによる新しい生活様式のもとでも、歩みを止めず積上げた成果をまとめていただきました。

加藤一哉先生は、コロナ禍における園長の役割について、毎日の職員に向けた通信を通して、園経営を具現化されていました。常に子どもを主語にして、教育に対するプロ意識や危機感をもって、組織的･効果的に指導にあたるノウハウが詰め込まれた長年に渡る実践となっていました。

「泉幼５歳児いずみっこ」の皆さんは、「なかよしマップ」の作成を通して、子どもたちの遊びを広げたり、友達との関りを促進したりする取組を丁寧にまとめられました。コロナ禍でかかわりが希薄になりがちな状況の中、意図的・計画的な支援がなされていました。また、５歳児担当の職員が協力し合って主体的に取り組むことは、園組織全体の運営にプラスに働いていることが伝わってきました。

奥谷治由先生は、継続的な学級通信の発行を通して、子どもの小さな成長を認め自己肯定感を育んだり、学校と家庭が同じ目線で子どもを支えたりすることを目指されていました。子どもを注意深く観察してそれを言語化することで、必要な支援を整理したり、学級集団に投げかける言葉を精選したりすることにつながっていました。

３ 今後に向けて



特別賞や奨励賞を含めて受賞された今年度の作品をあらためて振り返りますと、文字に起こし形にすることで、ご自身の取組を客観的にとらえて、方向修正をしたり、成果や課題を確認したりしながら、実効性のある指導・支援につなげていることがわかりました。そして、工夫を凝らして何とか子どもに力を付けようと、教育に対する情熱を持ち続け、挑戦や改善を繰り返して前進されている先生方がおみえになることに、大変心強く感じました。ご応募に深く感謝を申し上げるとともに、来年度も実践を継続していただくことを期待しております。ありがとうございました。

【学力向上推進委員会の取組から】

令和３年度　泉西小学校の実践報告

学力向上企画委員　泉西小学校　原　亜希子

泉西小学校では、道徳科の授業を中心に研究を推進している。その中で、土岐市スタンダード授業の重点項目に関する実践について述べさせていただく。

１　終末の姿の具体化

道徳科の授業では、本時の内容項目を踏まえ、設定したねらいに基づく展開後段での願う児童の意識を明確にして授業を行っている。大切にしていることは、児童の実態把握と担任としての願いの明確化である。担任が「〇〇さんが自己の生き方に結び付けられるように…。」と熱い願いをもって、授業を構想している。

本校では、道徳教育の要となる道徳科の授業を通して、児童の道徳的実践力を育むために、「課題作りに関わる手法の充実」「考えや立場の明確化、対話活動の活性化」「考えが変容した児童の位置付け、自己見つめの場の工夫」等を研究内容としている。これらは道徳科の授業だけでなく他の教科の授業においても大切にしたい内容である。コロナ禍の中、対話活動については十分実践を重ねることができていないが、願う姿として掲げた終末の姿を具現するために、発問の吟味や対話活動・自己見つめの場の吟味を行っている。

【写真】終末での自己見つめの発表

２　明確な課題の設定

道徳科の授業においても、児童にとっての課題の必然性は重要である。本時取り扱う内容項目に関わって、事前にアンケートを取ったり、導入時で日常生活を想起させたりしている。

《課題例》
- 「本当の思いやりとは？」
- 「親切にされたら、どんな気持ちになる？」
- 「誰に対しても同じように接するには、どんなことが大切？」

導入で時間をかけ過ぎないように配慮しつつ、本時の価値についての方向付けができるようにしている。また、展開においては、より自分事として考え、自己見つめができるように「深めの発問」で思考を揺さぶったり、価値に対する考えを広めたり深めたりできるように４人班での話し合い活動を位置付けたりしている。

３　ＩＣＴの効果的な活用

道徳の授業でも、今年度導入された iPad を活用して、考えの交流を行ってきた。（ロイロ・ノートの活用）その結果、仲間の考えを参考にして自分の考えをもつ児童や多くの仲間と考えを共有して、自分の考えを深めたり広げたりする児童の姿が見られるようになった。対話活動につながる有効なツールとして、さらに活用方法を吟味していきたい。

４　今後の実践に向けて

対話活動など、道徳の時間で身に付けた学び方を他教科でも活用していきたいと考えている。「考え、議論する」主体は児童である。発問の精選、付けたい力に応じた活動の吟味など、教師が出過ぎることなく、主体的・対話的な学びが構築できるように、学力向上のための授業研究を推進していきたい。

【学力向上推進委員会の取組から】

令和３年度　学力向上推進委員会活動報告

学力向上推進リーダー　松原　敦也

１　土岐市スタンダード授業　令和３年度重点

令和３年度取組の重点
①広がり・深まりのある終末の姿の具体化
②「何を」「どう」すればよいかが明確にわかる課題設定

この２点について、各校が自校の学力向上の重点に位置付けたり、自校の重点を下支えするものとして位置付けたりしたことで、土岐市として統一感のある取組となりました。ありがとうございました。その成果は、これまでの「教育とき」の中で述べさせていただいたとおりです。

しかし一方で、本時の内容をわかりやすく伝えようとするあまり、深まりのない「教え込みの授業」になってしまってはいないかということを危惧しています。

２　令和４年度の方向について

令和２年度から２年間続けてスタンダード授業の重点①は「広がり・深まりのある終末の姿の具体化」でした。この中の「深まり」とはどういうことでしょうか。

学習指導要領解説には「深い学び」について、「各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら知識を相互に関連づけてより深く理解したり、～」とあります。また、「各教科等の特質に応じた『見方・考え方』についても、各教科ごとにその具体が書かれています。

【算数・数学科の見方・考え方】
事象を数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、論理的、統合的・発展的に考えること
⇒見　方　　⇒考え方

例えば、今年見せていただいた１年生算数科の授業たしざん「８＋３の けいさんのしかたを せつめいしよう」では、授業者はブロック、丸図、さくらんぼ計算という三つの方法が出てきたところで「三つのやり方に同じ所はありますか。」と投げかけました。この投げかけは「統合的な考え方」を促す発問です。そして、「１０のまとまりをつくる」という本時気付かせたい内容へ、三つの共通点に注目した児童の発言から導いていきます。教師が解説するのではなく、子供に考えさせるのです。また、授業者は児童の「見方・考え方」を自覚化させる働きかけを行いました。「三つの方法の同じ所に注目した〇〇さんのおかげで大切なことがみえてきたね。」といった称賛・価値付けです。

深まりは必ずしも一単位時間の中で求めていくものとは限りませんが、「見方・考え方」を促す教師の働きかけが、さらなる学力の向上につながると考えます。

「見方・考え方」を促す教師の働きかけを
①発問の工夫　②称賛・価値付け

「心にひびく言葉」

世に生を得るは、事を成すにあり

下石小学校　　校長　仙石　守一

ご存じの方も多いと思いますが、坂本龍馬が残した言葉として有名です。龍馬が作り出したかどうかの真偽については、平田派の学者が書いたものという説が有力なようです。

私がこの言葉と出会ったのは、一番苦手だった日本史に興味を持つために、大学生になってから読んだ司馬遼太郎の「竜馬がゆく」の中でした。脱藩をして、他の志士と共に、新しい日本を生み出そうと活躍した頃の言葉だと記憶しています。私自身、自ら立てた志を果たすために、自らを奮い立たせてくれる言葉であったと思います。

近年、この言葉について立教大学の中原淳教授が述べていらっしゃる文章に触れました。それは、『龍馬は「世に生を得るは、事を成すにあり」といったのです。決して「学ぶこと」ではない。すなわち「学ぶこと」が目的ではなく、あくまで、「事を成すため」の「手段」である。事を成すなかで、自分を変えよ！』という内容です。私たち教師の役割は、子供たちに「生きる力」を育むことです。つまり、私たちの目標は、子供たちに「学び」と通じて「事を成す」力を付け、自分の手を離れてもさっさと歩いて行けるようにすることだと読み替えました。

私は間もなく定年を迎えます。私自身、「事を成す」ことができたのかどうか、はっきりと答えが出ません。しかし、「生」は続いています。これからも「何かの事を成す」ことができるよう、「学ぶ」という手段を大切にしながら、精一杯お役に立てることを頑張っていきたいと思います。まだまだ、自分を変えていく必要がありそうです。

掲　示　板

◆令和３年度　岐阜県ふるさと教育表彰

《優　秀　賞》　妻木小学校：郷土の文化に対する誇りと愛着を育む活動に取り組む。
駄知小学校：地域と連携と協力を図り、地域を知るふるさと学習に取り組む。
泉 中 学 校：ふるさと学習の一環として美濃焼の茶碗制作に取り組む。

◆令和３年度　東濃地区学校図書館教育賞

《優　秀　賞》　泉 小 学 校　　《奨　励　賞》下石小学校　　《努　力　賞》西陵中学校

◆令和３年度「ひびきあい活動」表彰

《人権文化あふれる学校賞》　駄知小学校附属幼稚園　　土岐津小学校
《ひびきあい賞》　肥田中学校

【土岐市日本語初期指導教室開設のお知らせ】

前号の「教育とき」でお知らせした「土岐市日本語初期指導教室」が令和４年度４月から開設されます。当面は肥田中学校の一室にて、日本語指導が必要な外国人児童生徒を対象に初期指導を行います。

編集後記

「恩送り」の考え、私自身の未熟さを痛感します。(P1) ３校が図書館教育で表彰。読書の教育効果は多くの方が分かっています。子供たちにより一層読書習慣を身に付けていきたいです。(P2)　教育実践論文・実践記録の入賞、おめでとうございます。実践の成果や実践を論文や記録に残す姿勢が市内に広がることを願います。(P3-P5) 生涯学び続ける気概を持ちたいです。(P8) 今年度の最終号です。(感謝)